

Title	野生児をめぐる18世紀の緒言説 1 : 言説の位置の確認
Author(s)	吉田, 耕太郎
Citation	ドイツ啓蒙主義研究. 2022, 19, p. 31-37
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/88385
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

野生児をめぐる18世紀の緒言説 1

一言説の付置の確認

吉田 耕太郎

はじめに

「彼の様子やすべての動作は、青年の身体のうち、まるで2歳か3歳にも満たない幼児がいるかのようであった。大多数の警官のあいだでは、この男を白痴もしくは狂人とみるか、それとも半野生人 *ein Halbwilder* とみるかという点で意見がわかれた」¹。

これは、19世紀に実在したカスパー・ハウザーという青年、現在の表現を使えば、孤児または長期間にわたって育児放棄された人間についての同時代の記録からの引用である。この記録からわかるのは、カスパー・ハウザーが、青年というべき背格好をしているながら、動作は2、3歳にも満たない子どものようであるという異常性をともなった存在であるということ、周囲の人間はこの対象を理解するために、白痴、狂人、野生人といういくつかのカテゴリを試みていたということである。

本稿は2回にわけて、カスパー・ハウザーをはじめとする野生児、現在の言い方をするならば、保護者や共同体からの通常の育成をなんらかの理由で受けてこなかった子どもを、同時代の言説を映し出すプリズムとして利用し、18世紀前後の子どもをめぐる一連の言説の付置と、それらの言説が、どのような社会的かつ学術的な背景から発せられたものであったのかを明らかにすることを目的とするものである。全体の前半にあたる本論では、野生児をめぐる18世紀の言説の付置を概観することにした。

1. 野生児をめぐる想像力

さきほどカスパー・ハウザーをはじめとする一群の子どもたちの発見例は14世紀から確認されている。彼らは「野生児」、または狼や熊に育てられた子どもとして「狼の子」や「熊の子」という呼称でも呼ばれることがある。マルソンは、『野生児』のなかで、こうした子どもたちを、1344年から1961年までの期間に、53例をリストアップしている。リストアップされた子どもたちに共通して認められているのが、社会から隔絶されていた点である²。

この社会からの隔絶という共通の性格の指摘は重要である。というのも、そもそも野生児や狼の子という呼称自体がある種の文化的なバイアスを背負ったものであるからだ。17世紀に3例もの発見記録が残されているリトアニアの森で保護された熊の子たちが知られているが、そもそも3例とも別の子なのかどうかさえ現在では確かめることはできない。この子どもたちは熊に育てられていたのであるから、人間をみればひっかいたりかみついたりし、草や生肉を食べたという記録がのこされている。こうした行状についての真偽もまた、確かめる術はない。こうした子どもは、むしろ何らかの理由で共同体の周辺へとおいやられてしまった存在であり、日々、食べ物や衣服などの施しを受けながら、なんとか命をつないできたと考えたほうが、今日の私たちの理解にはあっている。社会から隔絶された存在という共通項は、野生児にまつわるステレオタイプをいったん外すことの必要性を私たちに教えてくれるものだ。

とはいえこうした子どもたちが、通常を理解をこえた存在であったことも確かである。クラヴィッターは、カスパー・ハウザーをめぐる言説をあとづける研究のなかで、カスパー・ハウザーをヒエログリフの身体と呼び、言説を作り出す機械と説明している³。クラヴィッターの言葉をいいかえるならば、カスパー・ハウザーは通常の子どもたちとは異なる成育プロセスを経てきた人間であるということで、そのような人間へと成育した理由をめぐる多種多様な言説を生み出す起点のように機能していたことを言い表したものである。

このような一連の野生児の報告に対しては、子どもを驚異として描き出そうとしている傾向があると、同時代においても指摘されていた⁴。ここにグリーンブラットがいうところの驚異の心的メカニズムが働いていると説明することも不可能ではない。野生児は理解をこえた驚異であるからこそ、それを理解するために様々な言説が生み出され、言説による囲い込みがおこなわれたわけだ。

社会との通常の接点を何らかの理由で断たれて育ってきた子どもにまず与えられたのが、狼から乳をもらうロムルスとレムスのイメージをはじめとして、人里離れて暮らしたキリスト教の隠者や、葉でつくられた腰巻きの男性の凶象でしられるオヌフリウスのように、森に住み野生の動物と暮らした聖人のイメージであった。または正反対に、悪魔のイメージが与えられることもあった。1531年にザルツブルク近郊のハスベルクの森で発見された森の悪魔⁵はその好例であろう。この人物は、鳥のような後脚と、狼のような前脚をもち赤い皮膚で、人間の顔をした典型的なキメラのイメージが付与されている。森の悪魔の元となった、人間がザルツブルク近郊で本当に発見されたのかもしれないが、その記録は人々の想像力に覆い尽くされてしまっているといえるだろう。

同じように1717年にクラーネンベルクで100人の農夫が動員された末に、網でとらえられた18歳程度の女性は、言葉をしゃべることなく、葉、薬草、牛乳だけを口にしていた。ほとんど裸であったが、藁でできた腰巻きのようなものをつけていた。そして彼女の皮膚は黒く厚かった。この女性が、1700年に誘拐された子どもかもしれないという記事が、オランダの新聞に掲載されると、その女性の母親が名乗りでてきた。野生の女性とその母親が再会すると、この野生の

女性は母親に微笑みかけ、涙を落とした。この女性については、アンナ・マリア・ゲンネルトという本名も伝わっている。母親と共に暮らすうちに、アンナの野生性も失われ、その象徴であった黒く厚い皮膚もはえかわったと記録されている。なんらかの理由で親とはぐれ、森にいるところを発見されたのであろうが、保護するために 100 人もの農夫が必要であったのか、なぜ腰巻きを自作しなければならなかったのか、何故皮膚の黒さがことさら強調されているのか。これらは、野生性のイメージを強調するためのレトリックであったともいえるだろう。それは同時に、アンナの人間性の再獲得が、母親との対面時の涙やその後の皮膚の生え変わりによってより効果的に描き出されていたのと同様である。

このような野生児は、18 世紀に入ると、想像力で語られる対象から、調査の対象へとうつってくる。その背後には、人間の知性を学問的に解明しようとする動きに対応したものであった。聖人や悪魔の類比によって語られてきた野生児にむけられた最大の関心事は、神の概念を所有しているかどうかであった。神の被造物である人間であるならば、その知性のうちには神の観念が生得的に植え付けられているはずである。しかし同時に、人間は後天的に知性を獲得し経験的に神の観念を理解する道筋もある。人間の知性の源泉を論じたこの時代の経験論哲学の確証作業の題材となったのが、ハーメルン近郊で保護された野生児ペーターであった。

ペーターはイギリスへと渡り、この哲学上の難問を実証するための実験台となった。ヘルンフト教団のニコラウス・フォン・ツィンツェンドルフもイギリスに渡り、このテストに立ち会ったと伝えられている。ペーターはしばしば学校にも通い、いくつもの方法でもって本を読むことを教えられ、また宗教の原理についての教育が試みられたが、無駄であったと記録されている。「ペーターは何も学ぶことなく、また、彼自身の感情でもって、神についての意識をもっていることを示すことはなかった」⁶。ペーターは人間が生得的に神の観念をもっていることを証明したが、同時に、経験によって観念を獲得することもなかった。この公開試問を機に、ペーターは学問上の表舞台から姿を消すことになる。ペーターの報告を、人間性が回復されなかった野生児の例として解釈することもできるが、病気などの理由から知的な能力を欠いており、育児放棄され、共同体の周辺に追いやられていた例とも解釈が可能である。さらにまた幾度となく教育が試みられたとは言え、ペーターには、正しい教育が試みられなかったのかもしれないと、この報告から推測できる点は多数残されている。

同じように、カスパー・ハウザーにもまた、宗教教育が試みられていた。「彼にとって、宗教は火花にもならず、教義もまたほんの少しもの火薬にならなかった。何人かの牧師が、はやくも彼がニュルンベルクにあらわれた最初の週に、彼のなかに宗教や教義を探し求め、そして宗教へと赴くよう刺激させようと不屈の努力を試みた」⁷。しかしカスパー・ハウザーは宗教については全く理解しなかった。それでもなお彼は、野生児ペーターのように、関心を失うことなく、終始人間として教育がこころみられることになったのも、当時の時代背景が大きなく影響していた。

2. 野生児のタクソミー

まず野生児の分類について確認しておくことにしたい。リンネが、『自然の体系』（初版 1735 年）で、四足歩行の動物と対比させて、サルやナマケモノといっしょに人間をヒト形目 *Anthropomorpha* として分類していたことはよく知られる。リンネは分類の検討を継続し、『自然の体系』（10 版 1758 年）では、霊長目という分類をつくり、その下位にヒト属をもうけ、そこに「ホモ・サピエンス」と「穴居人」という分類をもうけた。穴居人という名称はとても奇妙な印象をうけるが、岡崎勝世は、「存在の連鎖」を念頭に、穴居人を、ヨーロッパには未だ知られていない、人間により近い、高等なサル類のために用意されていたカテゴリーであると論説している⁸。

リンネは、このホモ・サピエンスのなかに、アメリカ人、ヨーロッパ人、アジア人、アフリカ人、野生人 *Homo sapiens ferus*、奇形人 *Homo sapiens monstrosus* をおいていた。このような大きな分類体系への関心と並行して、穴居人や野生人といった人間の動物との媒介する中間的な存在への関心は依然として強く残っていたことが知られている。ホモ・サピエンスの下位におかれたこの野生人も安定した分類位置があたえられていたわけではない。山中浩司が指摘するように、リンネが指摘したような野生人は人間と動物の区別、知的能力の先天性や後天性といった議論の渦中にあり、その評価は一定ではなかった⁹。リンネは、人間と動物の中間的な存在の探究に関心が強く残っていたようだ。1760 年にリンネは、弟子のクリスチャン・エマニュエル・ホッピウスに、ヒト形目についての論文をあらためて発表させている。「着飾った貴婦人と森に放置された人間をくらべてみれば、どちらも同じ人間であるとはまったく思えないだろう」¹⁰と生涯を森の動物と過ごした人間を獣人 *Thiermensch* として紹介している。

リンネとホッピウスは、ヘッセンで保護された狼に育てられた子（1344 年）リトアニアの熊に育てられた子（1661 年の発見例）、アイルランドの羊の子（1672 年）、既に言及したハノーヴァー近郊で発見されイギリスで生涯を終えた野生児ペーター（1724 年）を獣人として紹介している。獣人の特徴は、しゃべることができず、振る舞いは粗野で、手と足をつかって移動し、また容易に木に登ることができる。一瞥すれば、彼らが人間よりも動物に近く見えるのは明らかであって、彼らとサルとの本性の区別をみつけることのほうが難しいと結論づけている¹¹。

こうした分類上の手がかりとして、言葉を話すことができない、手と足で移行する、粗野に振る舞うといった外から観察できる概観や振る舞いが活用されていた。例えばチンパンジーを人間とサルの中間の存在であるとしたエドワード・タイソンもまた、双方の表情の相似について言及している¹²。分類するための手がかりそのものが、時代によって異なっていることを、私たちはたえず思い返さなければならない。リンネとホッピウスは、この獣人という人間と動物の中間的な存在を設定することで、「顔も足も、直立歩行も、人間の外形的な構造は、サル類一般と何ら変わっていない」¹³ということ、つまりヒト形目という分類もやはり可能であることを主張していた。

3. 野生児と自然状態

インゲンジープは、ド・ラ・メトリの『人間機械論』が提示した、人間の動物に対する優位を否定する態度、そしてルソーの『人間不平等起源論』での議論を指摘することで、野生児を人間の自然状態と同一視する態度があらわれたことを指摘している¹⁴。確かに『人間機械論』は、ゴリラやポンゴのような大型の動物を野生人と呼ぶ記録を引き合いに出し、そしてまたサルと人間の解剖学的な類似性を持ち出して、聴覚障害者の言語教育を実践していたヨハン・コンラッド・アンマンのもとで訓練を積みばサルも言葉も覚えるはずだと指摘していた¹⁵。そしてまたルソーは、『人間不平等起源論』の冒頭で、人間の自然状態を正しく理解し、その発展をたどることが必要であると述べていることは知られているが、この人間の自然状態を具体的に想起させる役割になったのが、ヘッセンで狼にそだてられた7歳の子ども(1344年発見)、リトアニアの熊の子(1694年、2例目)、ピレネーの双子(1719年)、野生児ペーター(1724年)ら四人の野生児であった¹⁶。

分類の編みの目で捉えるのではなく、歴史的なパースペクティブでもって野生児を理解することで、野生児はこの時代の言説の中であらたな役割をはたすことになった。とりわけ文明史記述でみられるように、近代的な市民社会とそこで実現された文化状態を、仮想的な過去の状態から説き起こす議論の説得力が認められる言説が現れるようになると、野生児は、人間の過去の状態、つまり文明化する以前の自然状態を示す例として位置づけなおされることになった。

とはいえこの自然状態という考え方にも大きなズレがあった。ルソーの自然状態は、後にヘルダーが言語起源論のなかで批判するように、自然の叫びから人間の言葉がうまれたと説く点で、人間を動物に近づけ過ぎたものであった。その一方で、たとえばプーフェンドルフの自然法においては、自然状態は、改善された生活 *zierliches Leben*¹⁷とも、市民状態 *der bürgerliche Stand*とも無縁¹⁸であるものの、しかし知性をもたない野獣たちの生活とも異なる状態であり¹⁹、自然状態の人間は、光 *Erleuchtung* をもって自らの諸行為を理性的 *vernünftig* に導くことのできる存在であった²⁰。

自然状態の人間に一定のモデルを与えることになったイザーク・イゼリンは、自然状態の人間を知性を持ちながらも、それが発揮されていない状態として論じている。つまり文明史とは、人間が動物的な状態から跳ね上がり、ゆっくりであるとはいえ、人間が有している知性が完全性へと発展していくプロセスをたどること²¹、つまり、そのそれぞれの知性の段階で可能となった発明や制度などを記述することであった。野生児ペーターは、知識人の面前で、神の観念の生得性も後天性も明らかにすることがなかったが、その後は農村にてひっそりと暮らすことになった。おなじように宗教は全く理解しなかったものの、カスパー・ハウザーは、人間の文明化のプロセスを再現するために、根気強く教育がほどこされた。その背後には、彼にもまた知性があり、ただそれが発展していないだけであるという人間理解の定着が前提となっている。

この知性を発展させる様々な試みは、子どもを対象とした近代的な教育カリキュラムを支えた思想でもあった。

4. 野生児と言語の起源

「親切なニュルンベルク市民たちの、人間的な関心から、このあわれな若者に送られた物、玩具のひとつひとつで、彼は新しい思考の素材を獲得し、若干の概念そして話し言葉も豊富になった」²²。カスパー・ハウザーは隣人たちの人間的な関心にささえられたサポートにより若干の言葉も覚え、会話もできるようになった。

カスパー・ハウザーをはじめとした野生児の言語の再獲得は、18世紀の言語起源に関する論争のひとつの回答でもあった。言語起源論の最大の争点は、言語の起源は神にあるのか、それとも人間にあるのかという点にあったが、野生児が言語を再獲得し、言語を操ることができるようになるプロセスは、言語を自然状態から自らの力で作り出す例証となった。

先ほど言及したヘルダーは、オラウータンは人間と動物の間存在的な存在であるとはいえ、決して言語を作り出すことはできないと、言語能力を、人間と動物とを区別する最大の特徴として擁護していた²³。それゆえリトアニアの熊に育てられた子どもを例にとり、この子どもたちは人間の知性が抑圧されており、言語を使うことができなかつた反自然的な状態におかれていた人間と説明している。ここでも知性の認められない人間を間存在的な存在へと分類するのではなく、知性が自然状態においていまだ展開していないだけであったと歴史的なプロセスへの眼差しを確認できる。

匿名で出版されたティーデマンの言語起源論²⁴もまた、ヘルダーと同じように、言語は人間が獲得したものであることを論証するものだが、ティーデマンは、品詞の多様化、文法の複雑さの点から、人間の知性の発展と言語の獲得とをからめて論じている。ティーデマンによれば、むしろ自然状態にある人間は、舌、肺、口蓋は、より活発に動き、叫び声をあげるに適している。そしてこうした状態の知性では、いまだ抽象的な観念は必要なく、「この木」と個物を叫び声によって伝えているだけで十分である。やがて「木」というモノを、他者に伝える必要がでてくると同時に、抽象的な観念が芽生えてくると、叫び声ではなく「木」という言葉を伝えることができるようになる。そして過去の出来事を伝える必要や、未来の出来事について話し合う必要が生じてくると、それに応じて文法も複雑さをましていくというのだ。ティーデマンもまた、野生児の言葉を身に付けるプロセスが、そのまま人間の言語獲得の再現として理解していた。

(以下、次号の論文にて、野生児の言説と、同時代の子どもについての言説との関係を論じることにはしたい。)

-
- ¹ Paul Johann Anselm Feuerbach, *Kaspar Hauser*, Ansbach 1832, S.35.なお翻訳については、西村克彦訳の翻訳を参照した。『カスパー・ハウザー』福武書店 1971.
- ² Jucien Malson, Jean Itard, Octave Mannoni, *Die wilden Kinder*, Frankfurt 1972, p.42f.
- ³ Arne Klawitter, *Kaspar Hauser als Diskurstopos und Körperfiguration*, in: *Bulletin of the Graduate Division of Letters, Arts and Sciences of Waseda University*, No.62(2017), pp.253-269; pp.255ff.
- ⁴ Vgl. Justus Sincerus, *Urtheil von Bernardi Connors, Evangelio Medici*, in: *Iusti Sinceri Vermischte Neben=Stunden*, 3. St. XIX, Wismar 1724, S.167–170.
- ⁵ P.J. Blumenthal, *Kaspar Hausers Geschwister*, Stuttgart 2018, S.104f.
- ⁶ *Neues vaterländisches Archiv oder Beiträge zur allseitigen Kenntniß des Königreichs Hannover*, Jg. 1825, 6.Bd., Lüneburg 1826, S.282-292; S.290; James Burnett Monboddo, *Ancient Metaphysics*, Vol.3, p.371.
- ⁷ Feuerbach, a.a.O., S.32.
- ⁸ 岡崎勝世「リンネの人間論 — ホモ・サピエンスと穴居人」、『埼玉大学紀要・教養学部』No.41-2(2005), pp.1-63.
- ⁹ 山中浩司「人間の科学—人類学の誕生—」、大林信治、森田敏照編『科学思想の系譜学』ミネルヴァ書房 1994.
- ¹⁰ Carl von Linné, *Auserlesene Abhandlungen aus der Naturgeschichte, Physik und Arzneywissenschaft*, Leipzig 1776, S.58.
- ¹¹ Linné, a.a.O., S.59.
- ¹² タイソンの著作のタイトルをはじめ動物を指し示す単語の混同については以下の研究を参照のこと。Carl Niekerk, *Man and Orangutan in Eighteenth-Century Thinking*, in: *Monatshefte*, 2004, Vol.96, No.4, pp.477-502; pp.480f.
- ¹³ Linné, a.a.O., S.59-60.
- ¹⁴ Hans Werner Ingensiep, *Der aufgeklärte Affe*, in: Jörn Garber, Heinz Thom (Hgg.), *Zwischen Empirisierung und Konstruktionsleistung*, Tübingen 2004. S.31-58; S.33f.
- ¹⁵ ド・ラ・メトリ『人間機械論』岩波文庫 1957, pp.61ff.
- ¹⁶ Jean-Jacques Rousseau, *Politische Schriften*, 1.Th., Berlin 1788, S.151f.
- ¹⁷ Samuel von Pufendorf, *Einleitung zur Sitten- und Stats-Lehre, oder Vorstellung der schuldigen Gebühr aller Menschen, und insonderheit der bürgerlichen Stats-Verwandten*, Leipzig 1691, S.387.
- ¹⁸ Pufendorf, a.a.O., S.388.
- ¹⁹ Pufendorf, a.a.O., S.385.
- ²⁰ Pufendorf, a.a.O., S.392.
- ²¹ Isaak Iselin, *Ueber die Geschichte der Menschheit*, Frankfurt 1764, S.101.
- ²² Feuerbach, a.a.O., S.66.
- ²³ ヨハン・ゴットフリート・ヘルダー（宮谷尚実訳）『言語起源論』講談社学術文庫 2017, p.64.
- ²⁴ Dieterich Tiedemann, *Versuch einer Erklärung des Ursprunges der Sprache*, Riga 1772, S.163ff.